パーニニ文法学派の固有名論と〈フレーゲのパズル〉

谷 沢 淳 三

インドにおいては，古くから語の意味とは何かという議論が盛んに行われていた。その中で，現代の言語哲学において〈固有名〉(proper name) が大きな議論をまきおこしているのと同様に，やはり〈固有名〉は特別に議論の対象となった。私は，パーニニ文法学派による固有名の意味論を現代哲学の固有名論との比較という観点から，すでに別の所で論じた[1]。本論文では，そこで問題点を挙げるだけで詳しく論じることのできなかったある主題をより詳しく取り上げることにする。それは，現代の言語哲学において「フレーゲのパズル」と呼ばれる問題を，パーニニ文法学派（以下「文法学派」）の考え方に沿って探究するとどうなるかということである。

「フレーゲのパズル」とは，サーモンに従ってここでは同一性言明のパズルのことを言うことにする[2]。たとえば，あまりに有名な例で言うと，「ヘスペラス (Hesperus)＝フォスフォラス (Phosphorus)」は明らかに何らかの認識上の価値，あるいは情報量を持った言明である。ところが「ヘスペラス＝ヘスペラス」は，取るに足らぬ言明であり，何も新たな認識価値，情報量を加えてくれるものではないと思える。しかし，「ヘスペラス」も「フォスフォラス」も金星という同一の指示対象を有している。どこからこの二つの言明の差が出てくるのか。フレーゲによる解答は，〈意味〉(Bedeutung) と〈意義〉(Sinn) を区別し，上述の二つの単称名は〈意味〉（このような単称名の場合は〈指示対象〉）は同一でも〈意義〉（＝指示対象の与えられる様態）が異なるということであった[3]。

パーニニ文法学派の直接指示論

上のフレーゲの考え方は大きな影響を与えた。ところが，1970年代頃から，このフレーゲの説は固有名に関しては，基本的に誤っているという考え方が台頭してきた。もっともそのような考え方の原型はより古く，ジョン・スチュワート・ミルに見ることができる。彼は，固有名は〈外延〉(denotation) のみを有し，〈内包〉(connotation) は持たないとしていたのである[4]。このミルの考え方を受け入れて，固有名はフレーゲ的〈意義〉を持たないという説を強く説いて，現代言語哲学に転回点をもたらしたのがクリプキである。1950年末頃から，様相論理における〈可能世界〉(possible world) という概念が意味の議論に導入され，「可能世界意味論」と呼ばれるようになったが，彼はその流れで1970年代になって，固有名は現実世界とは異なった諸々の可能世界においても（その可能世界にその対象が存在していれば）同一の対象を指示する〈固定指示子〉(rigid designator) であると主張した[5]。さらに彼は〈可能世界〉を持ち出さなくても，現実世界における様々な例を挙げながら，〈意義〉に相当するものが決して指示対象を限定するわけではないということを示した[6]。この考え方に沿って，固有名は，決してフレーゲの言うように〈意義〉に限定された対象を指示する

ということはなく，〈意義〉を介在せずに直接に対象を指示するという見解をとる哲学者が多く現れ，彼らの見解は固有名の「直接指示論」(theory of direct reference) と呼ばれるようになる。

これらの現代の言語哲学とは全く無縁であった古くからのインドの言語哲学ではどうであったか。まず，文法学派では，単称名に関連してフレーゲ的な〈意義〉と〈意味〉の区別に類似するものがすでに考えられていた。それは語の〈適用原因〉(pravṛttinimitta) と〈指示対象〉(vācya, abhidheya) の区別である。この区別に沿って，言語の指示ということを説明すると，語は〈適用原因〉によって限定された対象を指示するということになる(7)。この考え方で言えば「aはb（と同一）である」という同一性言明の認識価値は，「a」と「b」は〈指示対象〉が同じでも，〈適用原因〉が異なるところから生じるというように説明できる。ところが，彼ら文法学派は単称名でも〈固有名〉に関しては，「〈指示対象〉に存する〈適用原因〉を持たずに，人間の意図によってのみ適用される語」と定義しているのである(8)。そうすると，〈指示対象〉に存する〈適用原因〉を介在しないということで，彼らも一種の固有名の「直接指示論」を説いているということができる。では彼らはもし〈フレーゲのパズル〉を提示されたならば，どのように解決しようとするであろうか。

語の〈自らの形〉の強調

文法学派では，語の意味を説く場合との関連で，しばしば語の持つ〈自らの形〉というものを強調した。これは文字通りたとえば「てつがく」という語では「て」「つ」「が」「く」というそれぞれがこの順番に並んであるというものである。そして，この〈自らの形〉が，意味を表す機能，或いは意味理解の中でどのような役割を果たしているかを彼らがどのように考えていたかを見ることにしよう。

5世紀の文法学者，哲学者バルトリハリは次のように述べている。

> 認識において自らの形 (ātmarūpa) と認識対象の形が見られるように，語においては意味の形と〈自らの形〉(svarūpa) が見られる(9)。
>
> ちょうど明かりが二つの可能力，すなわち［自らが］把握されることと［そばにある他のものを］把握することを持っているように，全ての語にはこれら［二つの可能力］が異なって定まっている。
>
> ［自らが］対象であることに達しない諸語によっては意味は現し出されない。それらは単にそれが存在しているというだけでは，［自らが］把握されないかぎり諸々の意味を現し出すことはない(10)。

つまり，我々は言葉そのものを把握しないかぎり，その意味を把握することはない。これだけでは当たり前のことが述べられているにすぎない。しかし，意味の議論をする時に，たとえば「ソクラテス」の意味は何かという点について考察する時，その「ソクラテス」という語の〈自らの形〉に関して触れることは，固有名の議論が盛んになるまでは，意外に少なかったかも知れない。文法学派が語の持つ〈自らの形〉を強調したのは，第一に彼らが文法学者だったからである。当然彼らは語そのものを扱うので，彼らがその文脈で用いる言語はメタ言語であるということになる。そのメタ言語内の諸々の主語によって意味されるのは対

象言語内の語であり，その語の〈自らの形〉が問題となることがある。このように彼らは語の〈自らの形〉を取り扱いやすい環境にあったと言うことができる。バルトリハリは上の議論にさらに続けて次のように説く。

> それゆえに，［語の］〈［自らの］形〉が知られないことにより，「何と言ったのか」と尋ねられる。感覚器官にとっては現し出される対象に対して〈自らの形〉がそのように把握されることはない。
>
> 語の持つ［〈把握されること〉と〈把握すること〉という］二つの属性は，抽出されて区別あるものとして把握され，区別に基づく文法操作において矛盾することなく原因となる(11)。

つまり，たとえば「てつがく」というのは一つの語に他ならないが，それが日常の使用において意味を現し出す語として想定され得るし，また対象言語内の一つの語としても想定され得る。対象言語になることから文法上の機能が理解されることになる。つまり，この〈把握されること〉と〈把握すること〉というふたつの属性の区別は想定されたものであり，基本的には一体となっているものなのである。

このように，文法的説明において，語の〈自らの形〉そのものが指示対象になっているとしても，文法学派の考えはそのような点にとどまることはなかった。元来一体なものが〈把握されるもの〉と〈把握するもの〉という区別を持つということからその〈自らの形〉がメタ言語，対象言語のレベルを越えて考えられるようになったのである。すなわち，彼らは，語の〈自らの形〉を〈指示対象〉としてよりむしろ語の〈適用原因〉の一つとみなし，そこから語の，特に固有名の意味を考察したのである(12)。

具体的な固有名の議論に入る前に，実際文法学上の議論においても〈自らの形〉が〈指示対象〉のみならず〈適用原因〉と考えられたことを見てみよう。まず，Pāṇinisūtra（以下P.）1.1.68 'svaṃ rūpaṃ śabdasyāśabdasaṃjñā'（この文法学においては，テクニカル・タームでなければ語は〈自らの形〉を指示する）により，まずテクニカル・タームの例をあげて次のようにバルトリハリは述べる。

> 'vṛddhi'などの語が〈自らの形〉を原因として'ādaic'によって指示される〈名称の対象〉である諸々の語との関係に達する(13)。

そして，続けてテクニカル・タームでない場合，すなわち〈自らの形〉を〈指示対象〉とする場合の例について次のように説明する。

> ちょうどそれと同様に，［P.4.2.33 'agner ḍhak'における］この'agni'という語も，'agni'という語（＝'agni'という〈自らの形〉）に基づいて'agni'という語によって指示される'agni'という音との関係を得る(14)。

このように，テクニカル・タームの場合も，まず〈自らの形〉を原因とする。また〈自らの形〉を指示するメタ言語内の主語の場合でも，まず〈自らの形〉を〈適用原因〉とする。たとえば「てつがく」というのがメタ言語内の主語として「てつがく」という〈自らの形〉を指示対象とするような場合でも，まず「てつがく」は〈自らの形〉を〈適用原因〉として持ち，それから「てつがく」という〈自らの形〉を指示対象とする。このような観点からバルトリハリは，さらに文法学上の議論を続けていく(15)。

日常表現においては，たとえば「ソクラテス」はある人物を指示し，その人物そのものが〈意味〉だとか，ソクラテスの意味は「〈無知の知〉を説いた者」「毒人参を飲んで死んだ古

代ギリシャの哲学者」のような記述によって与えられるとか言うときに，意味はその語〈自らの形〉とは切り離された所で考えられている。〈自らの形〉と関わる説の一つは，たとえばラッセルによって説かれている。すなわち，ソクラテスは少なくとも「「ソクラテス」と呼ばれる者」という記述と結びつくというのである[16]。この点に関しては後で触れることにする。語と意味というのは関係を持った別個のものであるとされるのが普通である。そして，上のバルトリハリの議論も，まだ両者が別個のものとして考えられていると思われるかも知れない。しかし，実は彼の，あるいは文法学派の考えでは，上述したように語の〈自らの形〉が語の〈適用原因〉の一つ，すなわち語の側に存する〈通用原因〉とされることから，意味理解の上で重要な役割を担うものとされたのである。

語と意味の相互〈重ね合わせ〉説

バルトリハリは，*Vākyapadīya* の中で語と意味との関係に関して考察した「関係の詳しい考察」（sambandhasamuddeśa）の最初で次のように述べている。

> 発せられた諸語によって，使用者の認識，外界の意味，［その語の］〈自らの形〉が理解される。それらの関係は定まっている。
> 聞き手には，［上に挙げた三つの中で］［外界の］意味や［使用者の］認識に対してははっきりと理解できない場合がある。しかし，聞かれた［語の］〈自らの形〉に対しては，逸脱はない[17]。

つまり，ある者が「牛」と言った場合，それを聞いた者はその使用者が何を考えているのか，あるいはどの牛を指しているのかに関してははっきり分からない可能性がある。しかし「牛」という語の〈自らの形〉に関しては，（普通の状況でその語が聞かれる限り）不確かな点は起こらない。そしてさらに後でバルトリハリは次のように主張する。

> 語は意味の原因である。なぜならばそれ（＝意味）はそれ（＝語）によって生じるのだから。同様に，心を領域とする意味に基づいて語が理解される[18]。

つまり，聞き手の立場に立つと，話し手の語が意味理解の原因となる。また後半部で述べられているのは，話し手にとっては，意味を原因として語を発するという行為に導かれるということである。聞き手の立場に限ってこの因果関係を「この語はこの意味の原因である」（ayaṃ śabdo' syārthasya kāraṇam）というように「この意味の」（asyārthasya）という〈第六格〉（ṣaṣṭhī 属格）を使った表現で表してみよう。このような表現では〈第一格〉（prathamā 主格）で表されている「この語」（ayaṃ śabdaḥ）と〈第六格〉の「この意味」のそれぞれ意味しているものの間の〈区別〉（bheda）が強調されている。また，語と意味の関係を〈表示するもの〉（vācaka）と〈表示されるもの〉（vācya）の関係として「この語はこの意味を〈表示するもの〉だ」（asyārthasyāyaṃ śabdo vācakaḥ）というような場合も同様である[19]。ところが「これが牛だ」（ayaṃ gauḥ）という表現では「これ」（ayam）と「牛」（gauḥ）の両語が共に〈第一格〉で用いられており，このような場合は両者が〈無区別〉（abheda）であるということが強調される。ここで念頭に置かれている文脈は，目の前にいる動物を見て，ある者が「これは何なのか」と尋ねたのに対する答えというものである[20]。それゆえに，文法学者の分析に従うと，この場合は「これ」の指示対象で

あるものに「牛」という述語の意味する属性が当てはまるというよりも，「これ」の指示対象である〈牛〉に対して「牛」という語すなわち名前が当てはまることが言われている。言い換えると，意味（＝「これ」の指示対象）である〈牛〉と語としての「牛」との無区別が強調されるということになる。このことをヘーラーラージャは「意味は他ならぬ語より成るものとして現れる」と述べている[21]。またナーゲーシャバッタの説明はこうである。（以下に出てくる〈重ね合わせ〉とは，インド哲学で度々出てくるタームであり，縄を見て蛇だと思うように，非Aに対してAであることを言わば重ね合わせて，Aだと思うことである。上のような例では「縄に対して蛇を〈重ね合わせ〉する」というように言うことにする。）

> ［目の前にある瓶に関して］何という語で［それは呼ばれるのか］，何が意味か尋ねられたとき，［前者の問いに対しては］「瓶」というのが［それを呼ぶ］語だと［答えられ，後者の問いに対しては］「瓶」というのが意味だ［と答えられる］ように同一の形をした答えが見られるがゆえに，両者には〈重ね合わせ〉（adhyāsa）があることが確定する[22]。

我々は命名の時はまさしく文法学派の言うとおり「人間の意図によってのみ」ある語の形を対象に適用するかも知れない。（これは必ずしも正しくないことは言うまでもないであろう。たとえば日本において子供に名前を付ける時に，その時代・習慣にそった名前が付けられるのであり，「ゴンザレス」「へぺほぽぽ」というような名前を「意図」したからといって付けることは，可能であっても非常にまれである。）その場合，確かに上の対象に対して語の〈自らの形〉を〈重ね合わせ〉するというのは理解しやすい。（ここでの議論は，語と意味の相互〈重ね合わせ〉の中で，語の意味への〈重ね合わせ〉という面に限ることにする。）しかし，命名の段階以外で我々が普通に固有名を使用する場合はどうなのであろうか。この場合は，決して我々は対象に対して恣意的にその名前を適用することはない。文法学派の言う「人間の意図」の「人間」とはあくまでも命名者のことである。では，クリントンに対しては「クリントン」という名前を皆が使用する。これはどうしてか。固有名がフレーゲ的〈意義〉を持つことに反対する者たちの中で，このことを説明した有名な説は「固有名の因果論」（causal theory of proper names）であり，固有名は命名の段階から歴史的に何かしらの連鎖を繰り返し，現在の用法に至っているというものである[23]。文法学派は残念ながらこの重要な問題に類するものに詳しく触れていない。しかし，彼らにとって語〈自らの形〉というのは，けっしてその名前を使用するものにとって独特のものであるわけではない。バルトリハリは次のように主張している。

> 全ての語によって，まず自らの〈全体としての本質的属性〉（jāti）が表示される。次に意味の〈全体としての本質的属性〉の形（rūpa）に対して，それの〈重ね合わせ〉が想定される[24]。

ここで語の「自らの〈全体としての本質的属性〉」とは，たとえば，「クリントン」という固有名にとっては〈「クリントン」という語であること〉（サンスクリットとしての表記では krinton (?) śabdatva）を言う。そして「クリントン」の意味の〈全体としての本質的属性〉とは〈クリントン性〉（krinton(?)tva）である[25]。つまり，我々が語の〈自らの形〉を〈重ね合わせ〉するというのは，いわばトークン（token）としてではなくタイプ（type）としての〈自らの形〉を〈重ね合わせ〉することにほかならない。当然固有名の場合もそうであるべきである。ただ，〈全体としての本質的属性〉としての〈自らの形〉とは，意味論上のタイプのレベルで考えられているのか，たとえば古代ギリシャの哲学者の‘Aristotle’と大船

主として知られた'Aristotle'とでは異なるのかどうか，あるいは物理的なタイプとして考えられて，上の両者の'Aristotle'においては等しいのかという問題は残る[26]。文法学派の〈重ね合わせ〉説に従えば，物理的なタイプとして考えても，結局それは異なった対象に〈重ね合わせ〉されるので，異なった用法が確保されることになると言うことができるかも知れない[27]。

バーニニ文法学派の意味の心像説

上で〈重ね合わせ〉を論じた箇所でのバルトリハリの引用からもわかるように，文法学派で語と意味の〈重ね合わせ〉と言う場合の意味とは，第一義的には心の中に考えられているものである。すなわち，彼らは西洋でもある時期非常にはやっていた「意味の心像説」をとっていたわけである。この意味の心像説に対する批判はし尽くされた感があるのでここでは触れない[28]。その批判は当然文法学派の意味論にも当てはまるものである[29]。その意味で彼らの意味論には限界がある。たとえば，彼らの説に従えば「ソクラテス」という語の意味理解は，頭の中にある指示対象ソクラテスに，「ソクラテス」という名前が〈重ね合わせ〉することによって，そしてそれを外界の指示対象とみなすことによって起こる。しかし，その場合の頭の中の指示対象とは何であり，どのようにして出てくるものなのであろうか。ここにおいて，日常表現においてその名前がどのように使用されるにいたったかという観点からの詳しい説明が欠けているのである。すなわち，個人個人の頭の中にあるものでは，社会的言語活動は説明できないという心像説批判が関係してくる。この点は後でまた触れることにする。

〈自らの形〉は意味なのか

このように，文法学派では，語の〈自らの形〉をたびたび語の〈適用原因〉であるとみなし，語の〈適用原因〉というのは，彼らにとって意味として考えられるべきものであるので，語の〈自らの形〉もまたある場合には意味となると考えていた。そして固有名の場合は「〈指示対象〉に存する〈適用原因〉を持たない」ゆえに〈自らの形〉のみを〈適用原因〉とするものとなる。しかし，〈自らの形〉とはあくまでも語の側にあるものである。語と意味という区別がなされる場合，語の側にあるということは言うまでもなく意味の側にあるものではない。意味理解という観点で考えれば，語は意味を理解する〈手段〉であるので，当然その理解というひとまとまりのもののなかで欠かせない働きをする。だからと言ってそれが意味を構成するものであるということにはならないかも知れない。

現代の直接指示論者によるフレーゲのパズルの解決の一つの道は，意味論とそれ以外のものを区別し，解決を後者の方の中に見い出そうとすることである。たとえば，そのような道をとっている代表者とも言えるサーモンは次のように説明する。我々は「意味論的に記号化された情報」(semantically encoded information) と「語用論的に伝えられる情報」(pragmatically imparted information) を区別すべきである。そして「ヘスペラスはヘスペラスである」と「ヘスペラスはフォスフォラスである」の両者は，意味論的な観点からは同一の

情報を与えている。ある者が「ヘスペラスはヘスペラスである」と信じても「ヘスペラスはフォスフォラスである」とは信じないということが起こりうるということは，語用論的な観点から考慮されるべきである[30]。

二つの問題点

ここで，我々は文法学派の〈自らの形〉論に関して，二つの問題点に達したということができる。まず第一に，〈自らの形〉の意味への〈重ね合わせ〉というのは，サーモンの言う意味論上の情報に入るものなのか，あるいは語用論上の情報とは言わないまでも，とにかく意味論上とは異なった観点から見られるべきものなのか[31]。そして第二に，〈自らの形〉が〈重ね合わせ〉された意味，すなわちそのように〈重ね合わせ〉された〈指示対象〉という場合，文法学派の説く「意味の心像説」とどのように関わって説かれるべきものなのか。

これら二点を考察するのに，同一性言明以外の例で考えてみると良いかも知れない。そこで，直接指示論者が，語は決してフレーゲ的〈意義〉によって限定された〈指示対象〉を指示するわけではないことを示すのに使う例の一つで考えてみよう。それは使用者の誤解という場合であり，クリプキらの挙げる例[32]を，日本での例で書き換えてみよう。ある者達が「郷ひろみ」という固有名に対して，誤って「松田聖子と離婚した芸能人」という記述を結び付けているとする。（この記述をこの現実世界において（1998年10月23日現在）唯一満たす対象は，実は神田正輝である。）そこで彼らが「郷ひろみが昨日コンサートを開いた」と言った場合，彼らの用いる「郷ひろみ」という固有名は，その「松田聖子と離婚した芸能人」という記述内容を満たす神田正輝を指示することは決してなく，やはり郷ひろみを指示していると考えるのが当然である。それゆえに，ここではフレーゲ的〈意義〉に限定された〈指示対象〉が指示されるという考え方は正しくないということになるわけである。サーモンによれば，このような誤解の例も含めた多くの場合に，直接指示論の方がフレーゲ的な〈意義〉を認める説よりも好ましい[33]。つまり，そのような場合，「郷ひろみ」の意味論上の情報は，サーモンに従えば郷ひろみという〈指示対象〉そのものということで説明がつく。ところが，文法学派の考え方でいけば，当然この場合も「郷ひろみ」という〈自らの形〉が〈重ね合わせ〉された〈指示対象〉ということになる。つまり，文法学派にとっては，〈自らの形〉の〈重ね合わせ〉というのはどんな場面でも考えられるものであり，彼らにとっては意味論上の情報であるということになるように思える[34]。

では，文法学派が語の〈自らの形〉を意味の一種とみなすというのはどういうことなのか，もう少し見てみることにしよう。語と意味の〈重ね合わせ〉ということから，彼らは語と意味とが「同一」であるとみなしている。この場合の〈同一性〉（tādātmya）とは，決して文字通り同一であるということではない。ナーゲーシャバッタは次のようにその点を説明している。

> 〈同一性〉（tādātmya）とは，それとの区別が［実際は］あるにもかかわらず，それと区別がないものとして理解されることである[35]。

すなわち，語と意味とが〈重ね合わせ〉して，同一だとみなされるというのは，あくまでも両者は本来異なっているということが前提となっている。しかし，我々の日常言語活動に

おける意味理解においては，意味がそれだけで理解されることはあり得ない。必ず語が〈重ね合わせ〉した形で理解されるのだと彼らは言いたいわけである[36]。

では，次に〈自らの形〉説と意味の心像説との関わりはどうなるか。これについては，やはり郷ひろみの例が，文法学派の説の欠陥を浮き上がらせている。話し手の頭の中の郷ひろみという指示対象とは何なのか。あくまでも「郷ひろみ」は外界にいる郷ひろみを指示していることにより，「郷ひろみは昨日コンサートを開いた」により聞き手への伝達が可能になる。あくまでも心の中の郷ひろみが外界の対象として考えられるところに初めて意味の社会性が生まれるのである。そして，この場合の使用者は，郷ひろみに関して「松田聖子と離婚した芸能人」という誤解をしている。それでも彼（彼女）は「郷ひろみ」によって郷ひろみを指示するのに成功している。つまり問題となるのは彼（彼女）の心の中ではなく，心の中では誤ったことを考えているにも関わらず，どのようにして彼（彼女）が郷ひろみという〈指示対象〉に対して「郷ひろみ」という名前，〈自らの形〉を〈重ね合わせ〉することに至ったのか，という点なのである。そこにおいては当然個人の頭のなかではなく，この社会における「郷ひろみ」の用法を考慮しなければならない。そうすると，文法学派は心の中での語と意味の〈重ね合わせ〉を重要視しているが，やはり社会的言語活動における意味という観点からすると，そのような〈重ね合わせ〉を経た上であっても外界の指示対象を〈意味〉とすべきであろう。彼ら文法学派の固有名の意味論は，フレーゲ的〈意義〉を介在させないという点では「直接指示論」であるが，心的なものを介在させるという点では「間接指示論」であるということができる。そしてその心的な〈意味〉を説く以上，それは「意味の心像説」批判にさらされることになる。結局「郷ひろみ」と外界の郷ひろみとがどのようにして関係を持つに至ったのかが彼らによっては何の説明もなされていないに等しい[37]。

結　論

以上のように，文法学派にとっては，語の意味理解というのは，深くその語〈自らの形〉が関わったものであるということが示された。この考えを〈フレーゲのパズル〉に関わらせて見るとどうなるか。「ヘスペラス」という語を聞き手が理解するという場合の意味理解では，「ヘスペラス」という語の〈自らの形〉が〈重ね合わせ〉された状態での指示対象が理解される。「フォスフォラス」の場合は，「フォスフォラス」という〈自らの形〉が〈重ね合わせ〉された〈指示対象〉が理解される。それゆえに「ヘスペラス＝フォスフォラス」は認識価値を持つ言明である。しかし，文法学派によれば，この場合の〈指示対象〉というのは第一義的には聞き手の心の中に想定されたものとしての〈指示対象〉である。それゆえに，この場合このような「主観的な」〈指示対象〉によってどうして話し手，聞き手らの間に伝達が可能なのかという問題が残る。あるいは，このような主観的な心的状態から，どのようにして外界の〈指示対象〉へと通じるのかが説明されなければならない。客観性を持たせようとして，そこに別の要素を加えていけば，結局，では意味というものはそのような心に想定されたものではないということへと通じていく。ともかく文法学派では，なぜ同一の固有名が使われるのか，という問題と同様に，心の主観性と言語の社会性との関わりから生じる問題に十分気づいていたとは言えない。

この社会性との関わりに関連して，次のような問題が起こる。文法学派の説は，結局〈自らの形〉と〈指示対象〉が結びついたものが，固有名の〈情報値〉であるということである。このような理論をサーモンは'verbal theory of information value'と呼んだ[38]。しかし，この考え方は固有名に限らず他の表現にも当てはまると考えられることになり，サーモンが指摘しているように，同じ意味を現していると考えられる異なった表現のそれぞれが実は異なった情報値を持っているということになってしまうなどの難点が出てくる。実際，上で見てきたように，文法学派も〈自らの形〉の〈重ね合わせ〉というのは言語表現一般に起こると考えている。そうすると，例えばある表現を異なった表現で翻訳した場合も，情報値は異なったものにしかならない。これは正しいであろうか[39]。

また，我々はラッセルの言っているあることを思い起こすかも知れない。ラッセルは，日常言語における固有名を「切り詰められた記述」(truncated description) と呼び，何かしらの記述と置き換えられるものだと主張した[40]。たとえば「ソクラテス」という名前は「毒人参を飲んで死んだ古代ギリシャの哲学者」などの記述で置き換えられる。そして，少なくとも「「ソクラテス」と呼ばれる者」という記述で置き換えられるとする。このように，もし「ソクラテス」の〈情報値〉を「「ソクラテス」と呼ばれる者」とするならば，それは「「ソクラテス」という語の〈自らの形〉が結びついたソクラテスという指示対象」に等しいと言うことができるかも知れない。しかし，クリプキはこのような見解に意義を唱える。彼によれば，指示の理論として「ソクラテス」の指示を説明するのに「「ソクラテス」と呼ばれる者」というような「ソクラテス」が含まれている表現を使うと，それは循環論法の誤りとなる[41]。クリプキが正しければ[42]，そして文法学派の説が結局「「〜」と呼ばれる〜」と言うのに等しいならば，当然この文法学派の〈自らの形〉の〈重ね合わせ〉された指示対象という説も循環論法に陥ることになる。文法学派では，上に見たように，命名の段階というものに重点が置かれているように思える。そうすると，ある命名者がある人物に「これは「ソクラテス」と呼ぶことにしよう」と「ソクラテス」という名前を付けるわけであるから，この段階においては全く恣意的に「ソクラテス」と名付けるという言い方が正しいとするならば，循環論法は生じないであろう。しかし，日常表現における「ソクラテス」の用法ではどうか。クリプキは歴史上の因果的な連鎖によって「ソクラテス」の用法を説明するわけだが，文法学派においては，上述のようにその視点が欠けている。それゆえに，なぜ「ソクラテス」という〈自らの形〉が指示対象と結びつくかということが説明されない[43]。それゆえにそれだけでは循環論法であろう。逆にいえば，その歴史的な因果関係という視点が欠けているからこそ，彼らは〈自らの形〉が意味に〈重ね合わせ〉されるというようなことを単純に言うことができたのである。

彼らの説においてその社会的，歴史的観点が欠けている理由のひとつとして考えられ得ることは，彼らにとって，語，意味，両者の関係が〈常住〉(nitya)，すなわち確定している (siddha) ものであると伝統的に考えられているという事実である。しかし，彼らが特に〈固有名〉に関して論じた大きな理由は，それが〈恣意的な語〉(yadṛcchāśabda) であり，明らかにその伝統と反しているという点にある[44]。そうすると，彼らは当然なぜその「恣意的な」語が，個人レベルを越えて社会一般において使用されるようになっているかを論じるべきであったのだが，それをしなかった。〈恣意的な語〉以外の語は常住であるとしたが

ゆえに，それらに関しては，なぜその語が使用されるのかを説明する必要はない。なぜならば，彼らによれば，それらの語，意味，両者の関係はとにかく確定しているのだから。このことから，彼らには社会的，歴史的にある語がどのようにして使用されるに至ったのかということを考える基盤ができにくいということが言えるかも知れない。それゆえに，本来特にそれが問題になってしかるべき〈固有名〉の場合にも，問題とならないままで終わってしまったのかも知れない。

以上のように様々な問題点を孕んでいる文法学派の説ではあるが，我々はそこにかなりの可能性を見て取ることができる。本論文ではそれらを詳しく説くことはできないので，最後に簡単に提示するに留めておく。

たとえば，確かに語を心の中の意味に〈重ね合わせ〉するというのは問題である。しかし，この説を語が外界の対象に〈重ね合わせ〉されるという方向に持っていくことは，その〈重ね合わせ〉という行為が心の中で行われるものにしても決して難しくないように思える。そして指示対象について何も知らない場合でも，その知らない指示対象に対する〈重ね合わせ〉が可能であるとしなければならない。

また，情報値を〈自らの形〉プラス〈指示対象〉とした場合，固有名以外の表現の場合にもその考え方が当てはまると，異なった言語による情報は皆異なっているということになってしまう。しかし，固有名は特別であると考えることも可能である[45]。すなわち，文法学派では上で見てきたように，どんな表現でも意味理解において〈自らの形〉は大きく関わるものであるのだが，この〈自らの形〉を情報値として持つのは固有名の場合に限るとするのである。実際，彼らの考え方では，語，意味，及び両者の関係は常住であるので，それに合わない「人間の意図によってのみ」適用される固有名は特別扱いするべきである。たとえば，その常住であるという原則に適っている表現については，〈自らの形〉の対象への〈重ね合わせ〉を情報値に含まれないとし，固有名の場合はそれを言語の外から情報値を与えるものとするという方向で考えることが可能かも知れない。

そして，〈自らの形〉プラス〈指示対象〉とした場合，結果としてたとえば「ソクラテス」の指示を説明するのに「「ソクラテス」と呼ばれるもの」により説明することになり，これは循環論法となるというクリプキの批判にも，解決方法はあるかも知れない。たとえば，それは「指示の理論」ではなく「（フレーゲ的〈意義〉とは異なった）意義の理論」だという方向[46]から文法学派の〈重ね合わせ〉説を捉えることも可能であるかも知れない。

[註]

(1) Tanizawa (2000). しかし，これは2000年出版予定ということで，本論文の方が先に公表されることになってしまった。なお，ここで「固有名」に相当すると考えられているサンスクリット語は'yadṛcchāśabda'(恣意的な語)，あるいは'saṃjñā'（名前）だが，実は必ずしもそれらは固有名とは限らない。その点についても Tanizawa (2000)を参照。

(2) Salmon (1986, 7).

(3) Frege (1980, 56-78).

(4) Mill (1973, 33).

(5) Kripke (1980, 48-49, 55-60). すなわち，たとえば植木等がある可能世界において，クレージーキャッツのメンバーになっていなくても，「スーダラ節」を歌っていなくても，普通のサラリーマンになっていても，「植木等」は同一の対象を指示する。

(6) Kripke (1980, 79-91)

(7) 語の〈適用原因〉に関して詳しくは，谷沢（1990）参照。

(8) たとえばBhartṛhariの *Mahābhāṣyadīpikā*, p.50や *Śivasūtra* 'ṛḷk'に関する *Mahābhāṣya* の議論に対するKaiyaṭaの註釈 *Pradīpa* を見よ。

(9) *Vākyapadīya* 1.50

(10) *Vākyapadīya* 1.55-56.

(11) *Vākyapadīya* 1.57-58. なお最近赤松明彦氏により *Vākyapadīya* の第1章と第2章の和訳が出版された。そこにおけるこの箇所のバルトリハリ自註の訳（赤松 1998[1], 114-115）及びその自註に関する説明（赤松 1998[1], 271, 註158）は意味不明瞭であるので，次に新たにその自註の訳を説明を加えて示しておく。

「意味そのもの（arthātman）が〈本来の説明を有しているものの如くにあること〉（vyapadeśivadbhāva）の対象となると，〈原因〉の区別に基づく心的想定によって定められた区別を有するものとなり，世間においても文法学においても第一義的な区別を対象として全ての文法操作がなされる。（たとえば〈黒ゴマ〉というものは単一な対象である。しかし，〈黒性〉〈ゴマ性〉という〈性質〉と〈全体としての本質的属性〉としての〈適用原因〉の区別によって「黒」「ゴマ」というように語が区別される。また，文法学においても，次のようなことが起こる。Pāṇinisūtra（以下P.）1.1.21 'ādyantavad ekasmin'（一つの文字に対して，それが最初の文字の如くに，あるいは最後の文字であるかの如くに文法操作が働く）という規則に基づき，P.6.1.1 'ekāco dve prathamasya（一つの母音を有するもの最初の部分の代わりに重複がある）が当てはまる完了形の変化の場合に起こるある問題の解決が図られる。つまり語根√ i や√ ṛ も重複されて'iyāya'や'āra'となるが，実は'ekāc'というのはbahuvrīhiなので，「一つの母音を有するもの」というのはその一つの母音とは別のものでなければならないことになる。なぜならば，P.2.2.24 'anekam anyapadārthe'（複数の〈格語尾で終わる語〉は，その個々の語義以外の語義を示すとき，任意に複合語となり，それはbahuvrīhiである）と規定されているからである。たとえば√ pacという語根はまぎれもなく「一つの母音（'a'）を有するもの」すなわち「一つの母音'a'」とは異なる'pac'なので，上のP.6.1.1が適用されて例えばpapācaというように変化する。ところが'i'などはその一つの母音そのものなので，そのP.6.1.1が適用されない事になってしまう。そこで√ i や√ ṛ も〈本来の説明を有しているものの如くにあること〉が適用されて，区分が想定され「一つの母音を有するもの」の如くに考えられ，P.1.1.21も適用されて，重複される。たとえば，唯一の母音にほかならない'i'に対して，そこからの変化形である'ayanam', 'itaḥ', 'etā'などという異なった用法における様々な語形に基づきbahuvrīhiとしての「それ以外の語義」（anyapadārtha）が想定される。このように，単一のものであっても心により様々な区別が想定される。詳しくはP.1.1.21に対する *Mahābhāṣya* 及び *Vākyapadīya* 3.14.16-18を見よ。また，谷沢（1991, 15-18）を参照。）それと同様に，諸々の語も心によって〈把握するもの〉と〈把握されるもの〉という可能力の抽出がなされると，文法学において第一義的な意味を対象としているかのように，〈名称〉と〈名称の対象〉の関係などの，区別に基づく文法操作が規定される。」

(12) 詳しくはTanizawa (2000) を参照。また一般的に〈自らの形〉が〈適用原因〉となるということに関しては，Śarmā (1977, 212-213) 参照。なお，赤松（1998[2], 204-217）において，文法学派における固有名の問題が論じられている。しかし，そこでは語の〈自らの形〉が〈指示対象〉（赤松氏の用法では「指示対象」と「表示対象」の両方が同じ意味で使われているように思

える)となるという観点しか述べられていない。それでは全く彼らの「固有名論」を説いたことにはならない。まして，名前が〈指示対象〉を持たない場合の難点を，文法学派は〈自らの形〉を〈指示対象〉とすることにより「回避した」(赤松 1998[2]，214-215) というのはあり得ないことである。赤松氏がそのことをそこで例を挙げているP.1.1.1 'vṛddhir ādaic'に関してだけのこととして言っているのか，あるいはそこから一般的なこととして言っているのか (一般的の場合，こんな解決を文法学派は決してしていないということは言うまでもない)，もう一つはっきりしない。しかし，そのP.1.1.1の場合に限っても，次のようになる。P.1.2.45，4.1.1により，〈意味〉(artha) を持ったものが〈名詞語幹〉(prātipadika) と認められ，〈名詞語幹〉になって初めてその後に〈格語尾〉が付けられるので，そこでこの場合，被定義項として初めてここで導入される'vṛddhi'はその段階ではまだ〈意味〉を持っていないことになるので，その〈意味〉として〈自らの形〉が考えられ，その結果'vṛddhi'が〈名詞語幹〉の資格を得て，その後に〈格語尾〉が付く。ここでの〈意味〉としての〈自らの形〉とは，本論文でこのすぐ後に示しているように〈適用原因〉と考える方が自然である。大体，もしここでの'vṛddhi'の〈指示対象〉が〈自らの形〉であったら，'vṛddhi＝ādaic'という同一性言明は「vṛddhi の〈自らの形〉＝ā，ai，au」というとんでもないことになってしまう。あくまでも，このスートラの定義によって，'vṛddhi'の〈指示対象〉は確定されるのであり，その定義が行われる段階における上述の問題の解決が図られているのである。因みに，赤松氏がその根拠とする *Vākyapadīya* 1.67 (赤松 1998[1]においては1.68) とそのバルトリハリ自註の彼の和訳 (赤松 1998[1]，125-126) 及び説明 (赤松 1998[1]，268-266，註169) は意味不明である。その最大の原因は'vyatireka'を (1.63 (赤松 1998[1]では1.64) の'vy-ati-ric'の用法に引きずられて？)「弁別的想定」と解釈していることだと思われる。そこでのvyatirekaとは，基本的に「しのぐこと」という意味だが，それについては，*Mahābhāṣya*，vol.1，461-462，464 (赤松氏もこの箇所を註に明記してあるのだが) と *Vākypadīya* 3.14.6，さらにはCardona (1967-68，315-324) 及び谷沢 (1991，6-8) を参照。当該の *Vākypadīya* 1.67 (赤松1998[1]では1.68) に関してはTanizawa (2000) の中に英訳と解釈が示されている。

(13) *Vākypadīya* 1.59.

(14) *Vākypadīya* 1.60.

(15) 上の註(12)を参照。

(16) Russell (1912，243)．同様の考えは，その後も数多く見られる。その点についてはRecanati (1993，155) 参照。

(17) *Vākypadīya* 3.3.1-2.

(18) *Vākypadīya* 3.3.32.

(19) Cf. *Vākypadīya* 3.3.3.

(20) Cf. *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā*, 45-46.

(21) *Vākypadīya* 3.3.2に対する註釈。

(22) *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā*, 38.

(23) Kripke (1980, 91-97) ; Donnellan (1972, 356-379).

(24) *Vākypadīya* 3 .1.6.

(25) ただし，このように言うと，当然固有名の対象の「全体としての本質的属性」とは何かという問題が起こる。それについては，*Mahābhāṣya*，vol.2，366及びその箇所に対する *Pradīpa* (vol.4，90-91)，さらにはTanizawa (2000) を参照。

(26) 「意味論上のタイプ」と「物理上のタイプ」に関してはDevitt and Sterelny (1987，58-59) 参照。文法学派では，昔から語形が等しくて複数の意味がある場合，同一の語が複数の意味を有す

るという考え方と，等しい形を持っているが異なった語がそれぞれの意味を持っているという考え方の両方があった。

(27) しかし，どのように異なった対象に〈重ね合わせ〉されるかが問題である。このように固有名が音の〈形〉(form) と〈担い手〉(bearer) の両方によって他から区別されるという固有名の捉え方をCohen (1980, 140) では固有名の'idiosyncratic conception'と呼び，〈形〉だけで他から区別される（その場合はここでの二つの'Aristotle'は同一ということになる）とするものをその'linguistic conception'と呼んで区別している。

(28) たとえば，飯田 (1987, 81-90) を見よ。

(29) 谷沢 (1989) 参照。

(30) Salmon (1986, 77-79).

(31) たとえば，Wettstein (1988) を見よ。

(32) Kripke (1980, 83-84).

(33) Salmon (1986, 124). 郷ひろみについて誤解している場合だけでなく，それが「郷ひろみ」と呼ばれること以外には何も知らない場合でも「郷ひろみ」という固有名を使うことができる。Putnam (1975, 246-247) 参照。

(34) しかしウェットスタインならば，語と意味の〈重ね合わせ〉と言っても，認識上のレベルで考えられるならば意味論上のことではないと言うであろう。Wettstein (1988) 参照。一方，Recanati (1993, 135-140, 157) では，カプランが〈指標詞〉(indexicals) に関して導入した〈意味特性〉(character) と〈内容〉(content) の区別 (Kaplan 1989, 500-507) を固有名の場合にも当てはめる試みがなされ，その場合，固有名の〈意味特性〉は「固有名'A'は'A'の担い手を指示する」という仕方で表現されるのものであり，〈内容〉はその〈指示対象〉である。この方向で行けば，文法学派にとって固有名の〈意味特性〉とは「固有名'A'は'A'の〈重ね合わせ〉された対象を指示する」という仕方で表現されるものとなる。この場合，その〈意味特性〉は「意味論上の情報」になる。(ただしカプラン自身によれば，固有名の場合，〈意味特性〉と〈内容〉(と〈指示対象〉) を区別することはできない。それゆえに，そこから〈フレーゲのパズル〉を解決することはできないことになる。Kaplan (1989, 562) を参照。)

(35) *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā*, 40.

(36) 語と意味との〈相互〈重ね合わせ〉〉と言っても，話し手と聞き手の意味理解において主たるものは今までの議論でも中心になっているように語の意味への〈重ね合わせ〉である。その点については，Śarmā (1977, 221) を参照。

(37) さらに上の註[33]で触れているように，郷ひろみに関して「郷ひろみ」と呼ばれるということ以外には何も知らなくても「郷ひろみ」という固有名を使用できる場合の心の中の指示対象とはどんなものであるというのだろうか。その場合には，「郷ひろみ」という〈自らの形〉が具体的なイメージが一切ない心の指示対象に〈重ね合わせ〉されるということになるのかも知れない。

(38) Salmon (1986, 71-72).

(39) このような説は受け入れられないとの指摘は次にも見られる。Kripke (1979, 274)(1980, 69), Searl (1969, 171). 一方，固有名詞の場合は特別に考えられるべきだとする説についてはKatz (1990, 53)を見よ。

(40) Russell (1912, 243)

(41) Kripke (1980, 68-70). そこでKripkeは直接にはWilliam Kneal ('Modality, De Dicto and De Re', *Methodology and the Philosophy of Science: Proceedings of the* 1960 *International Congress*, ed. by E. Nagel, P. Suppes, and A. Tarski, Stanford: Stanford University Press, 1962, 622-633) に反論しており，最後にRussellに触れている。

(42) 実際には，このクリプキの説には様々な反論が試みられている。それについては，Recanati（1993，158-161）参照。

(43) 彼らにこの説明が「全く」ないわけではない。しかし，「これが〜だ」というように〈重ね合わせ〉の形で年上の者からその用法を教わるというのが続いていくという説明に留まっている。

(44) Tanizawa（2000）の結論部分を参照。

(45) そのような説がRecanati（1993，161-165）で説かれている。

(46) Katz（1990, 40），及び上の註[42]参照。また，クリプキらの歴史的因果関係による説明は，意味論に属するものではないという見方が有力である。例えば，Kaplan（1989，559-562），Katz（1990, 54）を見よ。

テキスト

Pradīpa *Vaiyākaraṇamahābhāṣyam*, ed. by Vedavrata, Rohatak: Harayaṇā Sāhitya Saṃsthānam, 5 vols, 1962-63. 所収。

Mahābhāṣya *The Mahābhāṣya* of Patañjali, ed. by F. Kielhorn, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 3vols, 1962-72.

Mahābhāṣyadīpikā *Mahābhāṣyadīpikā*, ed. by V. Abhyankar and V.P. Limaye, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1967.

Vākyapadīya

Vākyapadīya of Bhartṛhari, Kāṇḍa I, Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute, 1966.

Vākyapadīya of Bhartṛhari, Kāṇḍa III, part i, Poona: Deccan College, 1963.

Vākyapadīya of Bhartṛhari, Kāṇḍa III, part ii, Poona: Deccan College, 1973.

Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā by M.M Sri Nagesha Bhatta*, ed. by M.S. Bhandari, N.S. Pendsey etc., Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1989.

参考文献

赤松　明彦（1998[1]）『古典インドの言語哲学 1 ブラフマンとことば』平凡社。

————（1998[2]）『古典インドの言語哲学 2 文について』平凡社。

Cardona, George (1967-68)'Anvaya and Vyatireka in Indian Grammar', *The Adyar Library Bullentin* 31-32,313-352.

Cohen, L. Jonathan (1980) 'The Individuation of Proper Names', *Philosophical Subjects: Essays Presented to P. F. Strawson*, Oxford: Clarendon Press, 140-163.

Devitt, Michael and Kim Sterelny (1987) *Language and Reality: An Introduction to the Philosophy of Language*, Oxford: Basil Blackwell.

Donnellan, Keith (1972) 'Proper Names and Identifying Descriptions', *Semantics of Natural Language*, ed. by Davidson and Harman, Dordrecht: Reidel, 356-379.

Frege, Gottrob (1980) 'On Sense and Meaning', *Translations from the Philosophical Writings of Gottrob Frege*, ed. and tr. by Peter Geach and Max Black, Oxford: Basil Blackwell, 56-78.

飯田　隆（1987）『言語哲学大全 I』勁草書房。

Kaplan, David (1989) 'Demonstratives: An Essay on the Semantics, Logic, Metaphysics, and

Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals', *Themes from Kaplan*, ed. by J. Almog, J. Perry, and H. Wettstein, Oxford: Oxford University Press, 481-563.

Katz, Jerrold J. (1990) 'Has the Description Theory of Names been Refuted?', *Meaning and Method: Essays in Honor of Hilary Putnam*, ed. by George Boolos, Cambridge: Cambridge University Press, 31-61.

Kripke, Saul A. (1979) 'A Puzzle about Belief', *Meaning and Use*, ed. by A. Margalit, Dordrecht: Reidel, 239-283.

———— (1980) *Naming and Necessity*, Cambridge: Harvard University Press.

Mill, John Stewart (1973) *A System of Logic*, Books Ⅰ-Ⅲ, Tronto: University of Tronto Press. [1st edn. 1867.]

Putnam, Hilary (1975) 'The Meaning of 'Meaning'', *Mind, Language and Reality*, Cambridge: Cambridge University Press, 215-271.

Recanati, François (1993) *Direct Reference: From Language to Thought*, Oxford: Blackwell.

Russell (1912) 'The Philosophy of Logical Atomism', *Logic and Knowledge*, ed. by R.C. Marsh, London: Unwin Hyman Limited, 1956, 177-281.

Śarmā, Virendra(1977) *Vākyapadīya-sambandhasamuddeśa: a Critical Study*, Horshiarpur: Punjab University. (in Hindi.)

Salmon, Nathan (1986) *Frege's Puzzle*, Cambridge: The MIT Press.

Searl, John (1969) *Speech Acts*, Cambridge: Cambridge University Press.

谷沢　淳三（1989）「インド文法学派における意味の問題—常住な意味と心像としての意味—」『東方学』77。

————（1990）「意味の二要素－Bhartṛhari と Frege—」『比較思想研究』17，39-45.

————（1991）『Bhartṛhari 著 Vākyapadīya 3-14：Vṛttisamuddeśa 訳註研究(1)』山喜房佛書林。

Tanizawa, Junzo (2000) 'Indian Grammarians' Theory of Proper Names', *The Way of Liberation: Indological Studies in Japan*, ed. by S.Mayeda, Y.Matsunami, M.Tokunaga and H.Marui, Delhi: Manohar Publishers & Distributers, 2000年出版予定。

Wettstein, Howard (1988) 'Cognitive Significance without Cognitive Content', *Mind* 97, 1-28.